三河アララギ

平成二十四年

三　月　号

第五十九巻　第三号

ニューヨーク日記(65)

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

January 16, 2012 : Scent of Syria

Blue Shoe Diaries

今シリアからお友達が遊びに来ていて色々面白いお土産もらっちゃった！香りがする物が結構印象的！このとても可愛いミニボトルは香水のボトルで甘い香りの花のパーフュームが入ってるの。香水を付ける人によって違う香りになるんだって。これ良い香りだよ～クセになりそうなぐらい。この他にもローズウオーターも頂！料理に使ったり化粧水として使ったりできて自然そのままの物っていいね～化粧水として使いだしたら肌がいい感じ！

My friend from Syria is visiting us in NY! And she brought some really pretty goodies! These are tiny perfume bottles and each contain this intoxicating flowery scent. It is said that the scent changes depending on the person wearing it. This has easily become our favorite scent now. It just brightens up everything. I think there's a lot of emphasis on scents in the middle east? We also got some rose water that is amazing. You can use it in pastries, or even as a toner for your face. The scent wakes you up nicely and my skin's been so smooth! It's nature's magic!

目次

第五十九巻第三号(通巻六九九号)

表紙　恐竜　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記(65)　Blue Shoe（2）
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」　（4）
歌集・「一本の木」　杉浦　弘（5）
ＯＭＯＩＤＥ　岡本八千代（6）
ピンポン　今泉　由利（7）
あるがまま　弓谷　久子（8）
寄せ植ゑ　内藤　志げ（9）
柚子の実　林　伊佐子（10）
わが母は　北川　宏廸（11）
風吹くな　安藤　和代（12）
吉事あれ　佐藤　喜仙（13）
十五夜　金津　文枝（14）
冬景色　伊藤　忠男（15）
野ぎくの花は　半田うめ子（16）
辰年の正月を　近藤　映子（17）
新年演奏会　伊与田広子（18）
柏手　清澤　範子（19）
猫柳を　胃甲　節子（20）
夫の居ぬ　杉浦恵美子（21）
拓真　堀川　勝子（22）
母の傍ら　平松　裕子（23）
田遊祭　山口千恵子（24）
厳そかに　小野可南子（25）

山の辺の道(2)　夏目　勝弘（26）
鴨の群れ　秋山　逸穂（27）
御津浜　白井　信昭（27）
『ことよせ』　いーはとぶ（28）
贈呈誌　新年号　（29）
『俳句』　植村　公女（30）
一石（30）
喜仙（31）
晧一（31）
『私の一首』　胃甲　節子（32）
伊藤八重子（32）
岡本八千代（33）
小野可南子（33）
「歴代天皇御製歌」（一）　今泉　由利（34）
絹の話(16)　今泉　雅勝（36）
物理学者と詩歌の世界(26)　一石（38）
短歌に詠まれた茂吉　鮫島　満（40）
田原西陵紀行　夏目　勝弘（42）
和歌から派生した季語の本意(その二十)　佐藤　喜仙（44）
「氷魚」のことから(134)　岡本八千代（44）
ことのはスケッチ(399)　今泉　由利（45）
和菓子街道(65)　平松　温子（47）
お知らせ・編集後記・三河アララギ規定　（48）

感銘歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」

筒鉢の中にかたよりはつはつに廬山の蘭のひくき花梗

P 192

銅鐘一つ弘安の銘をのこしつつ彫りたる文字の指にするどし

P 193

歌集「一本の木」

杉浦弘

暁の三時に起きて暖房し何を読まむと言ふにもあらず

鳥を知らず野草をしらず木を知らず人を覚えず七十をこゆ

山吹の枯れたる枝に降りつもる春の雪こそうつくしきもの

OMOIDE

蒲郡　岡本八千代

寒の空の遠く高きに鳶(とんび)幾つ舞ひてをりけりああ巻子さん消ゆ

思ひ出をＯＭＯＩＤＥと書きやや落ちつく君の訃報の悲しみのとき

白花のあぢさゐ欲しと言ひたれば君はさっそく携へ来たまひき

幽(かす)かなる風にもゆるる風知草を鉢ごと提げて君鳴海より

いつしかに君の風知草は枯れ果てつそのことつひに吾は言はざりき

キーン著の「百代の過客」を読みつぎて寒の夜々の愉しからずや

ぽつぽつの傘にふる音寒の雨ききつつ夜のポストへのみち

われにある一(ひと)日のリアルを活(くら)さむよまづは豆腐を買ひにゆくのさ

朝明けてとうふ買ひにゆくこの路地にまた水たまりの泥の小波(さざなみ)

昨夜(よべ)の雨にできし三つ四つの水たまりそれぞれ今朝の小波ゆれつつ

ピンポン

東京　今泉由利

覚えしと思ほゆ星の位置変はりあの日あの星いづくにかあり

アンデスの高きにありしビクーニャのショールをいだす寒波きたりぬ

ブロッコリーの花のつぶつぶかみしめてこの感覚よ生きゆかむため

熱くないぬるくもない湯にひたり思ひを馳する宇宙の水へ

ほんのりと磨りガラスに朱のさし木斛の実の弾けしならむ

権現の山に積りし白雪よ私のつける足跡つづく

朝まだき厚き匂ひの漂よひて蝋梅の花咲き初むを知る

擬態にも似てゐるかと終日を家に籠れり自分を守る

ウガンダの山の氷河のひとしずくナイル川になるを見届く

ピンポンをまたしてみむかピンポンの黄色くなりし球をピンポン

あるがまま

豊川　弓谷久子

あるがまま受け入れ今年も生き継がむ初日を待ちて縁先に佇つ

稜線に棚引く雲を赤く染め初日の光我に届けり

逢ふ事も無くなりたりき戴きし賀状に面影偲びてゐたり

勧めたる座蒲団の上にちんまりと母座りをり我の初夢

顔が見たくて来たよと母が夢の中夢と知りつつ胸熱くなる

諦めゐし君の賀状が届きたり明日は七草と言ふ日の朝

水茎の跡も美し君の手の賀状来りぬ少し遅れて

幾年の昔とならむ我が手にて振袖着せし子の成人式

賀状の礼姉にかはりてしたためる姉の最後の弟子なりし人

うからに縁の薄き姪なり我のだし巻き甘し美味しと

寄せ植ゑ

豊川　内藤志げ

年毎に庭に鉢にと移す梅手首程なる幹の太さに

梅を心に葉牡丹万年青（おもと）柊と今年の寄せ植ゑ写真に納む

鉢植ゑの梅に輪（わっか）の〆飾り紅白の結び目寿の増す

幾度も上下重（うえした）ねを組み変へて大き小さきわが鏡餅

昼に来て日暮れに帰るわが家の元旦恒例うから十人

座蒲団を曾孫の涼と手渡しに押入れに仕舞ふ元旦の日暮れ

冷えまさる雲静かなり北の窓本宮山は藍に凛々しく

白ざれの五畝（せ）の畑は一本のホースの水に土黒々と

玄関の寄せ植ゑの梅開き始むほほゑむごとし一枝一花

昨日には慈雨と喜ぶ寒の雨まだ止まぬかと見上ぐ夕暮れ

柚子の実

岡崎　林伊佐子

木守りともなりて残れる柚子の実が古家の庭に年の瀬を越す

嫁ぎ来て種より育てし柚子の木も庇を越へてたははに実る

帰郷して生きる物みぬ閑寂な村と変はりし世代をおもふ

いつの世に何を願ひて彫みしや三猿の石仏やま深く立つ

南天は霜にも雪にもくれなゐの玉実つけをりふる里の山

霜柱ふみゆく野路に小石のせ一足ごとに崩るる音する

うす陽さす杉森に降る淡雪がキラキラ輝き冷たく光る

人の手に触れることなくわが作る蔬菜は年立つ没り陽を浴ぶ

五十年余ともに暮せる老いふたり趣味はたがへどボケ防止する

早朝の散歩の道に金色のうすき朝焼歩みを止める

わが母は

東京　北川宏廸

湯浴みする九十二才のわが母はほほえみゐつつ洗ひてもらふ

冬の陽が部屋いっぱいにひろがりて母はくまなく明るくなりぬ

すばやいとすばしこいとは同義にあらず前者後者の定義は要らぬ

入院のベッドの上で短歌（うた）をはじむ子規の「写生」そのときに知る

このところ文語と口語の混用のちがひに託し三十一文字

いい言葉はいい人生をつくるといふ茂太を信じて短歌をつくる

孫娘をかわいがるのと孫娘がかわいくなるのは比例の関係

数独の上級パズルを全解すよろこび告げたき妻はいま留守

しばらくは新旧の手帳を同居させようやくに終ふ去年の手帳

恐らくは最後とならむ月蝕の赤黒き月皆既を見るのは

風吹くな

豊川　安藤和代

祖母の里はしぐれているや本宮山とっぷり雲におおわれてをり

冷えし窓に隣家の庭の南天の紅がありおはようと言う

子を恋うか母を恋いてか寒空を一羽鴉のゆくを見つむる

母よりも頑固な父の思ひ出が胸いっぱいに折をりあふるる

冷え増せば尚なほ深き千両の悲しきまでの赤きその色

冬の陽を柔らかに浴び玉葱のふくらみの白日々増して来し

目も耳も加齢と言われし昨日あり今日は真赤なセーターを着る

やさしさは強さの中に秘めるものコーヒー一杯今日のスタート

風吹くな雨よ降るなと祈りをり昨日は孫娘のマラソン大会

鵯は「ひーよひよひよと啼くんだね」孫に言われてなるほどと笑う

吉事（よごと）あれ

東京　佐藤喜仙

新しき年の始めの日の出見る列島あまねく吉事あれかし

冬木立蒼天に向け枝のばし元旦の杜に樹相よきかな

帝大の池を遊歩す三四郎美禰子に言はるストレイシープ

夫婦鴨三四郎池に水尾曳きて学問の府に悠々遊びぬ

みすずかる信濃の奥の安曇野の川は澄みけり水草泳ぎぬ

野火止の地に武蔵野の面影を色濃く残す平林寺の杜

なまよみの甲斐の青空その下の日本一高き露天の湯に入る

うどん屋の季節限定茸ずくし天麩羅つまみうまし昼酒

槇櫨の実小皿に置きて玄関に飲みて帰ればその香が迎ふ

裸木の空に夕星（ゆうづつ）三ヵ月と彼は誰れ時の冬の夕景色

十五夜

島根　金津文枝

サッカー稽古の如く境内の広場で松毬を蹴り遊ぶ小学生
好物柿の成り年なれば師走にても赤く熟す大粒を炉燵にて戴く
故郷米子市方言訛抜け切らぬ友夫亡くし年も終りぬ
誕生日近づく九十一才白鳥編隊人生初めて美しく見仰ぐ
三男運転車に乗る我の上空白鳥眞下より見仰ぐ嬉しさ
白鳥の美し編隊弓なりに間隔素晴しさ驚き涙
映画の好きな夫エリザベス・テーラー三人の幼な児連れ見に行きし遙かな思ひ出
昨夜は十五夜乾いた冬晴れ平成二十四年一月十日
野田改造内閣の発足朝日新聞切り抜き貯め置く
連休続き一月十日三男は温泉に行こうと電話し呉るる

冬景色

大阪　伊藤忠男

霜ばしら土押し上げし傘の下春はすぐそこ若芽息づく

初日の出拝む間もなく雲の中今年を暗に示すなかれと

窓の外凍える寒さ北風にサッシを閉じて一息をつく

メール打つ指先凍りままならず何度押せども文字定まらず

北風になびくマフラー寒さより熱き血潮がまたよみがえる

厳し冬川凍らすや西の風東巻き込み大雪を呼ぶ

青空に風穏やかな陽だまりの続く願いも今日明日のみか

ふるさとを離れ白髪目立つ歳思いなつかし若きあの頃

浅草も人出少なく店じまい冬空哀し夕月の影

冬景色味わうよりは耐え忍ぶ待てば春には夢の香りが

野ぎくの花は

新城　半田うめ子

風呂場にてねずみが石けんを引きて行くわが猫はただ見て居るばかり
西川の川辺に咲きつつ少しづつ散りて行くなり野ぎくの花は
東の杉林の中又今日もからすのさわぐ何ごとならむ
竹生社の森の中より舞ひ出でて白鷺の舞ふ陽の輝きし日
美しく姫百合の花塩瀬にてやさしかりき数多咲きをり
桑の実を食みし日ありき幼き日前畑に数本植ゑてありたり
靴下を洗って干して外出より帰りて見れば無くなりて居り
暁の作手の山より啼きて来る雉子は舞ひまふ楽しみ眺む
新聞を読みつつ淋し母親は己の子を殺害すると

辰年の正月を

名古屋　近藤映子

年越しに息子夫婦と囲む鍋娘と共に湯気立つ卓に
夫見舞ふ息子夫婦と年越を共にしたるは暖かし
いよ〳〵と大みそかの夕を迎えたり息子夫婦の鍋料理にて
大みそか我夫の穏やか顔の右手を擦り左手握手を
長男のお嫁さんの足マッサージ受く夫の穏やか顔の嬉し
久々に長男夫婦と鍋囲む一年の終日家族の交わり
辰年の元旦迎え此の年は再度（ふたたび）「薬師寺写経」を続けんと
物言わねど落ち着きし夫の顔息子夫婦と共に見舞ひぬ
新年も早や五日出勤の娘見送る朝日のまぶしき
正月のあっと言う間の三ヶ日七草用の菜花の並ぶスーパーに

新年演奏会

豊橋　伊与田広子

正月のわれの唯一の楽しみはウィンフィル新年演奏会
指揮するはマリスヤンソンス楽しきか笑みを浮かべつつ指揮をしをりぬ
ウィンフィル学友協会大ホールテレビ中継われは見入りぬ
毎年に演奏さるるドナウ川毎年異なるダンス付きをり
知らぬ間に廻りを見れば子や孫の年令なりし人ばかりなり
北国は積雪深きもわが地方今宵は冷ゆるも白雪降らじ
今年はインフルエンザ流行りをり外出控へ家に籠りをり
わが居間を照らしながらに陽の沈む沈めば急に寒くなりたり
人の声鳥鳴く声も聞へなきわが家の辺り零下となりぬ
初めてに庭のネーブル鈴成りに一つづつ剪りて楽しむ

柏手

春日井　清澤範子

庭植ゑの蜜柑黄色に色づきぬ木下のどうだん赤く赤い

八十才の夫は聴力おとろへて吾が声大きく夫呼ぶ時は

塀越しに南天は赤く実を垂れて鳥が啄み行くを見てをり

剪定せし椿の縮れ葉枝先より新芽かすかに伸び始めたり

寒の雨雪も混りて降る今朝は北の雨戸にポツポツの音

朝市に車走らせ特売の米運ぶ娘は安全運転

氷川きよしの演歌を歌ふその声に元気をもらひ台所に立つ

寒の冷ゑ風は刺す程に冷たくて母の形見のセーター暖かし

わが夫の前立腺の診察日肩を並べてバスに乗るなり

自転車に乗りて行く道八王子神社に拝礼柏手響く

猫柳を

豊橋　胃甲節子

初日の出二階の窓よりおろがみて新しき年への生命しみじみ

一月一日被害無かりし街に住む感謝を込めて日の出を拝む

張替の出来ぬ障子の一つさへ無理効かぬ吾の不甲斐無きかな

年賀状にて膝病みたまふと知りしより安堵して快癒を胸に祈りぬ

若き日は一番疎みし農業が今では只々懐しきかな

十六夜の今宵の月は赤みおび寒さに寂もる街並照らす

久し振りに洗髪すればさらさらと滑らかに心地良き此の倖せよ

ひよ鳥の騒がしき音を聞く事も何故か少なく今年は淋しき

長く見ぬ神田川堤は今頃は銀色に艶めく猫柳を見るべし

今夜より低温予報出でをればはや強風の吹きすさぶ音

夫の居ぬ

蒲郡　杉浦恵美子

夫の居ぬ新しき年始まりぬしっかりしなくちゃ声に出したり

我が為に夫が作りしお雑煮を舌が確かに覚えてゐるぞ

我が為に夫は生きけり今分かる人生最後の八ヶ月間

ほんのりとはにかむ遺影に向き居れば鼻の奥からツーンとしてきた

父母のときと異なる哀しみを味はひて居り夫逝きてより

五井山に今朝は冠雪なにとなく夫を訪ねて越えて行きたし

幼児期の夫が見たはず冠雪の伊吹や鈴鹿の山脈遠し

くしゃみせば家中に満つ反響がすれども直ぐに元の静寂

一日中籠りて居れば知らぬ間に音なく雨が降り始めたり

肩揚げがそのまま付きし我が晴れ着おそらく祖母が仕立てしものか

拓真

豊川　堀川勝子

木材の木屑こまめに貰ひ受け孫の来る日を只に待ち待つ
新築の木の香満ち充つ離れ家に正月帰省の孫子を泊めぬ
我の手をきつく払ひて金槌を握る拓真に少年を見る
拙なくも孫の初なる「椅子作り」真摯な眼忘れ難しも
孫帰り何するも憂きこのひと日障子の破れも目に追ふばかり
幼等の置きみやげなり破られし障子張り替へ終へて安らぐ
挿し木せる皇帝ダリアの太枝を植ゑ終へたりき春に近づく
産直にて売れ残りたる我がキウイ荷籠満タン引き取りにけり
鉢植ゑの草花数多捨て去りて団地住まひに成るとふ君は
鉢植ゑの草花数多譲り受け思ひ新たに春待ちわびぬ

母の傍ら

豊川　平松　裕子

眠りゐる母の傍らに目を閉ぢて眠れる人形の髪乱れをり
アカンサスの大葉凍れる今朝の庭赤き風車静かに回る
セルロイドの赤き風車庭に回るゆるりと回る静誠様いかに
庭に赤部屋に緑の風車古りにし年年静誠様よりのもの
汐見坂より海に落ちゆく日を見つつ友は助手席に眠り始める
夫のちぎる搗きたて餅を丸く伸ばし小豆の餡を手早く包む
夫と我と考への合ひて搗きし餅のすべてを餡餅につくりてしまふ
水鉢に張りたる氷を指に押し厚さを測り店に出でゆく
眼の隈の著き今日の母の顔我が名を呼びぬ間違はずして
酸素マスク外してベッドに眠りゐる母の眼の隈の今日は気になる

田遊祭

豊川　山口千恵子

水豊かに静かに流るる音羽川鴨らし幾羽の影の動かず
雲の間より射しくる朝の日の光音羽川の水面のひかる
はらからに少し遅れて登りゆく厄除け坂の石の階
常の日に戻りし朝の日の中に子らの寝ゆきし布団干したり
方形に椎の葉敷きつめ田とみなし田遊祭の今しはじまる
緩やかな年のはじめの日の下に田遊祭の神事のすすむ
一片をほぼ五十グラムの大きさに馬鈴薯の種いも切り分くる
芽幾つか付けつつ種いも切り分くる切り口みずみずキタアカリ種
たねいもの切り口みずみず黄の色に木灰くろくまぶし付けゆく
裸木の楓の枝に結ぶ種今朝晴れわたる冬日に光る

厳そかに

豊川　小野可南子

年去りぬ今年(とし)来たりたる鐘の音響きの中にすっきりと立つ

手を足を頬さへ髪さへ震はせて今年となれる大き鐘の音

悲しみの多くありたる年去りて今菩提寺の煩悩の鐘

少しばかり冷たきものも降る気配厳かにおごそかに新しき年

篠笛のテープ流しつつ睡らむよ七十路吾の子守唄とて

心弱くなりたる故かこの日頃しきりに母を父をし思ふ

ひと枝の乙女椿のうす紅を素直に喜ぶ母にてありき

十歳の私にみどりのフェルトのベレー買ひくれし父を想ひぬ

我が耳に拾えぬ小さき鈴の音車のキーは佑真が探す

雨止みぬ風も止みたり空の色天なる青と見上げこそすれ

山の辺の道(2)

豊川　夏目勝弘

山門より有料とあり老夫婦が花なき緑の五色椿の下
花の寺に花なく静もる青の下白細細と四季桜の花
四季桜の白の小花のみの寺カヘデの緑にもみづる一枝
離宮（とつみや）の址より見放くる奈良の街そして穏しき生駒の山並
大仏殿また五重の塔を今眼下古人も見し景ならむ
山肌に埋もるる様に石仏春日宮の佇まひいかに
北風の吹けば冬木となりならむ沙羅双樹にはつかな黄葉（もみぢば）
冬の日に温もる石段に休みゐて泡立つ缶よりのみど潤す
み寺への坂の中程よぎれる家並山の辺の道を春日大社へ
細細と音なく流るる能登川よ山の辺の道を歩み終へなむ

鴨の群れ

「招待」　秋山逸穂

総持寺の紅葉の一枝のすき間より昇る朝日に目を細めたり
黄葉ふる公孫樹並木に遊ぶわれ頭を肩を慰められぬ
夕暮れの雲の切れ目を陽は通り高層ビルをしばし照らしぬ
鴨の群れ水おとたてて舞い上がりやがて羽毛が風に舞いくる
葦原を黄金色にかがやかせ雲の合い間に朝日は昇る

御津浜

豊川　白井信昭

葉を落とし実のみとなりし柿畑風に晒さる熟れ色めだつ
見はるかす変らぬ海も島々も何か違へり年の瀬なれば
安礼の崎入り浜巡れる散策路いのちあるものみな揺れている
吹き晴れて御津浜のはるか沖合に自動車運搬船の横たはり見ゆ

『ことよせ』

（西浦公民館　いーはとぶ）

運転の夫の隣の助手席にてアメージング・グレイス聞きつつ雪の夜　稲吉友江

久々に窓越しに見ゆる十五夜の黄のひかりに夫を呼びたり　鈴木美耶子

どんよりと冬至の雲の広ごれり今朝の私の胸の内のごと　吉見幸子

灯明のわづかにゆらぐ蔵王堂に心清めむと含香（がんかう）を食む　牧原正枝

子供孫十一人が集ひ合ひこの大さわぎに屠蘇酌み交はす　岩瀬信子

月食の今夜の月を見むとする若きらに混らずわれはガラス戸より　石田文子

定命と絆の年のこの一年また新しき出合ひをねがふ　山崎俊子

夕やけのうすき光のひとところ萩の黄葉（もみぢ）のゆれてをりけり　三田美奈子

贈呈誌　新年号

「青森アララギ」　阿部勝美

里芋の青茎の皮ながながと妻の剥ぎゆく音のかそけさ　笹谷正一

汗しつつ自転車に街を駆ける日々かくして私の夏は過ぎゆく

「秋田アララギ」　千田千佳

玉川の穏やかにして洲に並ぶすすき穂光る夕づくなかに　眞野ミチ

分水嶺を過ぎてまもなく高き丘人り日をとどめ尾花の光る

「愛媛アララギ」　林好昭

時間には拘束されぬが取り得にて草引き中途で今日も帰りぬ　青柳知里

たはやすく磯見の舟を揺り上げて夕波幾重に弧を描く浜

「鹿児島アララギ」　蓑部厳夫

潮の動きとまりし川に跡長く引きつつ鴨の親子遊べり　増田教子

古びたるザルに子猫はまるまりて目を細め居り夕日差す庭

「高知アララギ」　沢村多美

大がかりの修繕さなかのわがマンション囲ふシートに秋日射し濃し　宮橋敏機

ミンミンとツクツクホウシわが行ける道を境に分かれて鳴けり

「滋賀アララギ」　佐本三恵子

右でよし左でもよし暇（いとま）ある今日は自在に四条河原町　古川和佐

眼ひらくは力が要るよけふひとひ閉ざす瞼にうつらうつらと

「冬雷」　加納久

おのづから朽ちて倒れたる木のありて林の奥に日が射してをり　赤川佳年

ブランコの真下の窪の水溜り細波たつる遊べる子なく

「柊」　石動玲子

古き家具のなかに埋まりゐる部屋にけふの朝日のさし入りてくる　南部輝子

いつしかに減りしわが庭の草花の数を指折り眠りを待てり

「郡山」　前田敏行

冬の雲今は静かに浮かびをり日の暮れとなる山陰の道　大野瞳

上り来て仔犬と休みしこの丘のシロツメグサの花も終りぬ

「椎の木」　滝朝江

よき風と挨拶交はし足弱き吾を追ひ越す犬連れし人　浜田規子

そんなにも急ぐ必要ないと思ひゆっくり腰を浮かせゐるなり

「穂の原」　中井美恵子

元旦に吾子にもらひしお年玉感謝をしつつエプロンのポケット

「かさね」　坂上じゅん

初しぐれ湖に波紋のすぐ消えし　吉田博行

水面に顔出す亀や秋高し

「俳句」

植村公女

初旅の飴の中から金太郎

乾きゐし硯の海や初稽古

円陣のゆるやかに散り冬牡丹

一石

春光や一瞬にして過去となる

大寒と言えど光の海であり

福寿草薬漬けなる我が身かな

冬そうび銀座の店の鉢に咲く

秋深し木曽路に響く斧の音

一笛の枯野に浸むる夕べかな

喜仙

天に向け枯木並木のプラタナス

吟行の日本水仙気品あり

天辺に栗の毬あり二月かな

晧一

私の一首

エゴの花数多の花は下向きに可憐な星型つつましき花

胃甲節子

エゴの花は毎年見ていても驚く位沢山の花をつけます。牟呂用水を越えて道路に届く位大きな木があり丁度下から仰ぐ位置より花を眺められます。小さな可憐な花で、いつ迄も見ていたく思います。丁度満開の時全部の花が恥じらう様に下を向いて咲きます。その姿が星型に見えて、とても美しいです。二度目に見た時は、こぼれ落ちる様に、用水路に散っている時でした。平凡ですが大好きな花を、変化のない生活の一首にしました。

裏庭の木に残されし次郎柿一つ捥ぎたり甘(あま)しよ甘(うま)し

伊藤八重子

何年か前、近郷の春祭りの植木市で息子と共に購って来た柿の苗木。植っ放しの裏庭で半日蔭の土では大きくもなれず忘れられた存在でしたが其の柿の木に今年は三つ程の果が生ったのです。捥ぐのをためらいながら採った次郎柿は何とも甘く美味しかったことでした。

ある時はよろよろとして休みつつこのミニ奥の細道歩めり

岡本八千代

晩秋、大垣市の水門川のほとりをひとり歩きました。水門川は総延長二千二百米もあり、水は桑名へと流れてゆく。その辺の道にはミニの「奥の細道」になぞらえて、処々に芭蕉の句碑も建っている。

ある時は歩いて、或る時は立ち止まって、句碑を読み、ある時は休んで水の流れを見たりして、結びの地、船戸町まで行ったのであった。若い頃と違って、その度によろけたりして、老いの自分を感じた時の一作。

ソファーに常なるままに弟は笑みを浮かべて旅立ちゆきぬ

小野可南子

六十九才にして逝った弟の挽歌です。長く透析を続け苦しい病の日々でしたが、その妻でさえも気がつかない程の自然のままに息を引き取っておりました。

次男であったこの弟を亡き母は、一番気にかけておりましたので、母が迎えに来たのかしらと思えるほどの安らかな最後でした。

私自身、思いの儘に一首にいたしましたが、ゆっくりと読み返してみて「常なるままに」を「常なるままの」にした方が良かったかなと反省しています。

「歴代天皇御製歌」（一）

今泉由利

『神武天皇』（第一代）B.C. 六六〇－B.C. 五八五

初代天皇。鵜葺草葺不合命（うがやふきあえずのみこと）と玉依姫の第四皇子。神武天皇の東征は、日向高千穂より天下平定のため、筑紫、阿岐、吉備を経、瀬戸内海を東へ進み、明石海峡を通り、浪速の白肩津に到着。

戦い、迎撃、滅ぼし…苦闘を経た、大和平定に至り、畝傍の橿原宮で即位。日本の紀元元年となった。

大和平定の戦闘の御製歌。

神風（かむかぜ）の　伊勢の海の　大石（おひし）に　這（は）ひ廻（もとほ）ろふ　細螺（しただみ）の　い這ひ廻り　撃ちてし止まむ

みつみつし　久米の子等が　粟生（あはふ）（粟畑）には　韮（かみら）（ニラ）一茎（ひともと）　そねが茎
そね芽繋ぎて　撃ちてし止まむ

建国という偉業を成しとげた後の、伊須気余理比賣の許に行幸され、一宿御寝されたときの御製歌。伊須気余理比賣はお后として後宮にはいられた。

葦原の　しけしき小屋に　菅畳　いや清敷きて　我が二人寝し

『崇神天皇』（第十代）在位 B.C. 九七ー B.C. 三〇

第九代、開化天皇の第二皇子。これまでの歴朝が皇居内に奉安した三種の神器のうち八咫鏡と天叢雲剣の二つを、大和の笠縫に遷し、御霊代として天照大神を奉祀。同時に、北陸東海、西海、丹波の四地方に道将軍を派遣。

永く文武の大権の基礎が確立され、日本全国規模の政権になった。

崇神天皇の治世は、中国の文献に記載されている邪馬台国と重なる。

十二月、丙甲、朔乙卯（二十日）、天皇、太田田根子をもって、大神（三輪明神、大神神社）を祭る。この日に、活日（大神神社の神酒を醸造する人）自ら神酒を天皇に奉った。

味酒　三輪の殿の　朝門にも　押し開かね　三輪の殿門を

絹の話 (16)

「アトリエトレビ」今　泉　雅　勝

絹と水虫

今から30年位前の事です。東京赤坂一木道りで4回目の新装オープンでやっと店らしい店舗（17坪）を開店して間もない頃でした。インド野蚕「タサール蚕」のワイルドな風合いに魅せられて盛んにブラウスやワンピースなどを作っていて、日本野蚕学会に研究発表会がある毎に出て、知識を吸収している頃でした。同学会で絹の抗菌性の話が有った時、豊橋の金伴繊維から絹の5本指靴下は水虫対策に大変効果があると聞きました。私はサラリーマンの時からひどい水虫に悩まされておりましたので早速履いてみました。絹の屑糸を絹紡糸にして作った物なので、夏物の靴下としては少々分厚く、白で5本指では他所に行って靴を脱いだ時みっともないので、その上にポリエステルの薄い靴下を履きました。靴がパンパンになりダルマの様になってしまいましたが、我慢して2ケ月履き続けました。当時の私の水虫は足の小指の付根の所に割れ目が出来て、日夜かゆくてたまりませんでした。売薬をつけて飛び上がるようなヒリヒリに耐えても、2、3日で元の木阿弥を繰り返しておりました。今でこそ皮膚科の医者に行けば売薬より安く、付薬と飲薬で僅かの間に直るのですが、当時は思いもよりませんでした。よくテレビでも水虫の薬の宣伝をしていました。

絹の靴下を履いた晩から、家に帰ってからもいつものようにかゆくないのです。3日もすると小指の割れ目が塞がってきて、かゆみもなくなりました。こんな嬉しい事は有りません。毎日2足を洗っては履きして、夏の2ケ月が過ぎました。もうその頃は水虫を意識しなくなっていました。もうよいと思い、化繊の靴下にもどして2年経過した頃の夏また水虫が騒ぎ出しました。急いで再び絹の靴下を履いたのですが、今度は1年経ったら又同じ事になりました。それを何年も繰り返しているうちに少しずつ静まっている期間が短くなって来ました。しかし当初の頃のように重傷ではありません。少し気になる程度です。皮膚科に行って看てもらいましたら、

やはり紛れも無い水虫でした。医者の処置も2年ぐらい効果がありましたが、どうしても元に戻ります。昨今では色々な種類の靴下が豊富にありますので、通年使い分けて使用して、水虫から解放されています。

絹には抗菌性（静菌性）はあるが、殺菌性は無い様です。また水虫菌も絹の抗菌性に対抗性を持つようになる事が解りました。中でも　ヤママユ蛾科の絹は　カイコ蛾科野絹より抗菌性が優れています。それはそれぞれの繭を作るアミノサンの構成比率に負うところが多いと思われますが、ヤママユ蛾科のものは種類ごと繊維の外側ばかりか、内側のフィブロインの中にタンニンやフラボノイド、カロチンと云った色素を持ち、複合的に機能していると思われます。また湿度の管理能力も少々異なります。ヤママユ蛾科の方が早く乾き、乾き過ぎない特徴も手伝っているでしょう。

夏に厚い靴下を履いたら、さぞかし熱く、むれると思われるでしょうが、靴の中は快適な温度と湿度です。

水虫が活発に活動するには絹の持つ温度や湿度ではあまり良環境ではないようです。

繭の構造は人類には未だ出来得ない偉大なシェルターです。繭の中の蛹は成虫（蛾）になって外に出る迄動く事も出来ません。繭は外から襲ってくる自然の外敵（紫外線、乾燥、湿度（水）各種雑菌）から蛹を守る防御装置です。

家蚕の繭は1週間ほど防御すれは蛹が蛾になって出てゆきますが、野蚕のタサール蚕などは1ヶ月から1年半と個体によってまちまちです。繭はその間蛹を安全に保護する為の機能性を備えているのです。自然界にはまだまだ未知の計り知れな英知が潜んでいます。蜂や蜘蛛の巣も絹ですので今後の研究でどんな機能性が発見されるか興味深いものが有ります。野蚕の繭によっては、触るとかゆくなったり、食べるとたちどころに脚気成ったりして、二度と食べられないように捕食から身を守るものも有ります。

今日では絹の抗菌性の事は一般化して来ましたがまだまだ知らない人の方が多い様です。絹の機能性は古くなっても衰えませんので、上手に再利用して下さい。

物理学者と詩歌の世界（26）

一石

マックス・プランク

今回は量子論の創始者とも言えるドイツの理論物理学者マックス・プランク（Max Planck、１８５８－１９４７）を取り上げる。

１８５８年、キールに生まれた。数学に早熟な才能を見せたプランクは17歳でミュンヘン大学に進学。数学を専攻したが、次第に熱力学に傾倒していった。しかし当時の指導教授は、熱力学は既に完成した分野であり、新しい発展はないとみなし、プランクが熱力学分野に進むことに消極的であった。このため、プランクはベルリン大学に移籍し、この分野の大家であるH・ヘルムホルツ、G・キルヒホフに師事し、「熱力学の第2法則」に関する研究で学位を取得。その後、ミュンヘン大学講師（１８８０）、キール大学教授（１８８５）を歴任し、その後ベルリン大学に移って同大学教授に就任（１８９２）、後に総長となる（１９１３）。また１８９４年にはプロイセン科学アカデミー会員に選出される（参考資料１、２）。

当時、黒体から放射されるエネルギー（黒体放射）に関して、熱力学の理論シュテファン＝ボルツマンの法則（注１）から導かれる予測と実験的に求められた結果（レイリー・ジーンズの法則、注２）との間に矛盾があることが知られていた。プランクは「光のエネルギーが、ある最小単位の整数倍の値しか取ることができない離散性を有す」と仮定する（プランクの量子仮説）とこの矛盾が解消されることを発見した（１９００）。これが「熱放射に関するプランクの法則」である。またこの過程で得られた光の最小単位に関する定数は後にプランク定数と名づけられ、物理学における基礎定数の１つとなった。

プランクが導いた結果は、当時の物理学の常識をひっくり返す革命的なものであり、後にA・アインシュタイン、N・ボーアなどによって確立された量子力学の基礎となるものであった。この業績からプランクは「量子論の父」とも呼ばれるようになり、ノーベル物理学賞を受賞した（１９１８）。

その他にもプランクの学問的業績は多い。特筆すべきものに、アインシュタインのゆらぎ理論を拡張したA・D・フォッカー（Fokker）理論の基礎方程式（フォッカー・プランクの方程式）の証明がある。また、Aアインシュタインの提唱した特殊相対性理論の重要性を直ちに理解し、当時の物理学界にその意義を広めた。科学の方法論に関しても、E・マッハらの実証主義に対し、実在論的立場から激しい論争を繰り広げた。

アドルフ・ヒトラーが政権をとった１９３３年以降、ユダヤ人に対する迫害が始まり、F・ハーバー（物理化学者）、E・シュレーディンガー、A・アインシュタインらが追放される異常事態となった。これに対し、プランクはヒトラーに直接抗議を行ったが、事態を改善することはできなかった。しかしナチス政権下でも亡命はせず、W・ハイゼンベルク（参考資料３）らと共にドイツに留まる道を選んだ。第二次世界大戦中のプランクは不遇であった。１９４３年にはベルリン空襲によって研究資料と共に家を失い、エルベ川畔のローゲッ

ツに疎開した。第二次世界大戦後、彼を記念してカイザー・ヴィルヘルム研究所（Kaiser Wilhelm Gesellschaft）はマックス・プランク研究所と改名された。マックス・プランク研究所は21世紀においてもドイツにおける科学研究の一大中心地として、様々な画期的研究成果を挙げている。

現代物理学ではプランクの名を冠した基本的な物理量が使われている。「長さ」も「時間」も勝手な値をとることが許されず、観測できる最小の「空間」、「時間」の大きさが存在する。これらをそれぞれ「プランク長さ」、「プランク時間」と呼ぶ。このように「長さ」や「時間」にそれらを測定しうる最小の大きさが存在する理由は「不確定性原理」（注３）に基づく原理的なもの。そのため将来いくら計測技術が進歩しても「プランク長さ」、「プランク時間」よりも短い「長さ」、「時間」の測定は絶対に不可能である。また「光速度」、「万有引力定数」、「プランク定数」という３つの物理定数を基本単位として選んだ単位系は「プランク単位系」と呼ばれる。この「プランク単位系」は「物理定数」だけで構成された単位系であり理論物理学に最適の単位系として用いられている。

マックス・プランクの伝記から。

○母の影響下、少年時代、音楽、特にピアノ演奏に関しては特異な才能を示した。物理学者として大成してからも生涯を通じてピアノ演奏を楽しみ、ホームコンサートではしばしば当時一流の音楽家と共演した。

○第一次世界大戦（１９１４）では、長男のカールを失っている。また１９４４年のヒトラー暗殺計画に加担した次男のエルヴィン（Erwin）が翌年に処刑され、自身も「国賊の父」とされた。

○ある朝の散歩中、息子たちに「私は大きな発見をしたようだ」と話している。「ひょっとするとニュートンを超えるかも知れない」と。

注１：シュテファン・ボルツマンの法則とは、黒体の表面から単位面積、単位時間当たりに放出される電磁波のエネルギーが、その黒体の絶対温度の４乗に比例するという物理法則。この公式は波長が短いときに実験と一致するが長波長領域では実験と合わない。

注２：レイリー・ジーンズの法則とは、古典物理学に基づいて導かれた黒体から放射される電磁波のエネルギー密度の理論式の１つである。この法則は、波長が短いときに実験結果と合わない。

注３：不確定性原理とは、「ある２つの物理量の組み合わせにおいては、測定値にばらつきをもたせずに２つの物理量を測定することはできない」、という理論のこと。量子力学では基礎原理の１つ「ハイゼンベルクの不確定性原理が知られている（参考資料３）。

参考資料

１）フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）マックス・プランク』

２）Complete Dictionary of Scientific Biography（http://www.encyclopedia.com/topic/Max_Planck.aspx）

３）三河アララギ、ヴェルナー・ハイゼンベルク、p36、第57巻、第11号（２０１０）

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」　鮫島　満

一、島木赤彦　1

島木赤彦はアララギの歌友。明治三十六年に信州において創刊した歌誌「比牟呂」を同四十二年に「アララギ」と合併、大正三年には教職を辞して単身上京、同四年二月からは仕事と研究に忙しい茂吉に代わって「アララギ」の編集発行人となった。

わが友の茂吉も来なく十日経たり火鉢に向きて火を吹く夜なかに

大正四年『氷魚』

これは「独座」と題する三首中の一つで、編集人としてのある日の無聊な一こまを詠んでいる。この前に「朝の茶の茶碗を膝におきにけり待ちくたびれて音信（たより）は待たず」「夜の街更けて嵐のきこゆなり来ぬときまりしたよりは待たず」がある。当てにしている茂吉のほかにおそらく古泉千樫や中村憲吉も来ないのであろう。茂吉らがやってきた時の歌に、「十二月二十六日茂吉、重と共にアララギを校正す」と詞書のある、

工場の音はたと止み夜は寒し三人だまり筆を動かす

同右

がある。寒いとはいっても茂吉が来てくれるとうれしいのであろう。

わが友の処方の薬口にふくみ直に寂しき冬日は傾く
歳末（くれ）の宿人皆国にかへりたり寂しと言ひぬ君に向ひて

大正五年　同

編集室兼居室として借りた部屋で、この冬は病で寝込んでいるのである。「たまの緒の命をつなぐ日々のもの薄粥飯（うすかゆいひ）も飽きぬるものを」と詠まれるような食事と茂吉が処方した薬とで養生しながら、多くの人が故郷に帰省した静かな家で年の暮れを迎えようとしているのである。この一連には「茂吉に与ふ」という題がついている。

中村は病み斎藤は忙しみ君が歌さへアララギになし

大正七年

「中村」は東大を卒業して郷里に帰っている憲吉、「斎藤」は長崎で医学専門学校教授になっている茂吉のことであり、「君」は古泉千樫である。この一首の前に「君が歌つひに来らず待ちまちて今日の日ぐれに校正終る」があり、題に「千樫に与ふ」とある。千樫は原稿の締め切りに遅れることが多く、編集を委せると遅刊になることもあったが、赤彦も泣かされているのである。

大正六年に長崎医学専門学校教授として長崎に赴任してい

た茂吉は同九年六月に喀血、入院する。赤彦は見舞に行こうとして茂吉に、「どうか当地に御いでになる事は御やめ下されたし。親しい友さへ面会ことわり居るのに君が来たりするといろいろ気を使ふ、ぼくは今籠居してゐなければならぬので、そのために無理に退院したのだ。……どうか当分安静にさせて下されたし」（大正九年七月十七日）と手紙で断られたが、それでも見舞いに行き茂吉を次のように詠んでいる。

わが友の命をぞ思ふ海山のはたてにありて幾とせ経つる
汽車のなかに眼にしむ汗をふきにけり必ず友を死なしめざらむ
山かひに入江は照れりわが友の命を見むと我は急ぐに
夏もなか病み衰ふる友のまへに心いたましく坐りつるかも
夏の日は暮れても暑し肌ぬぎつつもの言ふ友の衰へにける

（『太虚集』）

挙げた五首すべてに茂吉のことを「友」と表現している。前の三首は途中の大村湾で詠んだもので海と山の入り組んだ風景を見ながらも「友の命をぞ思ふ」「必ず友を死なしめざらむ」「友の命を見む」との心配から逃れられずにいる。四、五首目は南国九州の暑さの中に病み臥して「病み衰ふる」「衰へにける」状態になっている茂吉に驚いているのである。

このときのことを赤彦は歌友平福百穂宛ての手紙に、「無事今日午後五時十五分長崎着、直に斎藤君宅に参り候大に喜び少し話すぎるかと思ふほど話しかけられ候、今は起きたり寝たりし居り熱は無けれど実は幾分づつ例のもの痰に交り居り候依然絶対安静を要し候、極少量なれども二三日に一度位は交り居る由此事軽視すべからず、而して長崎の熱さ（ママ）にては是非転地を要し温泉岳が尤（ママ）もよろしき由（貴説の如く）例のものさへ無くなれば直ぐ出掛るつもりの由に候」と書いている。

茂吉は見舞いに来た赤彦を、「長崎の暑き日に君は来りたり涙しながるわがまなこより」「よしゑやしつひの命と過ぎむとも友のこころを空しからしむな」（『つゆじも』）と詠んで感激している。数日後、茂吉は雲仙岳に療養のために赤彦や妻てる子をともなって転地する。

そして帰京のために山を下る赤彦を、「この道に立ちてぞおもふ赤彦ははや山越しになりにつらむか」「赤彦はいづく行くらむただひとりこの山道をおりて行きしが」「きぞの朝友の行きたるこの道に日は当り居り見つつ悲しも」等と詠んだ。

茂吉はその後も、佐賀県唐津、同古湯温泉、長崎県西浦上、同小浜温泉、佐賀県嬉野温泉に転地して十一月には平癒、翌大正十年三月に帰京している。

田原西陵紀行

夏目勝弘

石激る垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも

（巻八・四一八）志貴皇子

万葉集を初めて読み、すぐ諳じ今に忘れられない一首である。志貴皇子という作者を知り月日が過ぎ、三河アララギの編集を手伝うようになり、そこで御津先生が大阪の帰りに、田原西陵に立ち寄って参拝された話をされた。

一度は行ってみたいと思い続けて、年月が過ぎてしまった。その間に読んだ万葉紀行（土屋文明著）の大和田原である。

土屋文明一行四名は、昭和十五年三月十一日に、春日宮天皇御陵に参拝された。

（…田原行のバスが出るというので、昼にはまだ大分間がある駅前でうどんを食ひ、早目に昼食をすませて置く（中略）あられ酒の小瓶を買ったものもある。）

私も同じくらいの時間に奈良駅に着いたが、田原行のバスは午後一時までない。

しかたなく売店で弁当と缶ビールを買いタクシーで行くことにした。

運転手に行く先を伝えると、知らないと言うので地図を見せる、すると以前天皇陛下が高円の天皇陵をご参拝されたとのこと、光仁天皇の東陵のことであり、志貴皇子の皇子で日壁王のことであることを知らせる。

西陵であるから東陵の西の辺ではないかと、とにかく向う。

文明一行の通った道は、バスが通れるようになった新道である。（…今私達がバスで上って居る道は、古い鉢伏峠の道ではなく、近年開かれたらしい新道である。（中略）私は一寸落胆したのである。）

今は高円ドライブウェイとなり、タクシーで爽快にとばして行く。

地図の当りまで来たが見つからない、運転手はそこでメーターを切り、探してくれると言うので甘えてしまった。

しばらく先に行くことにし、五分も行かず田原西陵のバス停が見えた。

横に春日宮御陵の立札、運転手に礼を言い降りようとすると、あまりバスの通らない所であるから、時間を確かめてから行った方がよいと助言してくれた。

反対側のバス停まで戻り、奈良行の時刻表を見ると、奈良行は午後二時までない、まだ十一時前であり、東陵へと思い地図を見ると、四キロはあり諦める。

文明一行は、東陵を先に参拝され、西陵へ向かはれたが、道に迷いに迷い、茶山の中や松山に登りなどして、ようやく西陵に参拝することが出来た。

タクシーを降り、その場所から一本の道が一直線に伸びている、先には石造りの鳥居が見える。

参道は晩秋とはいえ、落葉一枚もない清しさである。参道の両側の生垣は手入れされたばかりか葉刈りした匂いが漂っている。

巾一メートル長さ二百メートル余り、舗装された参道をゆっくり左右を、後を返えり見ながら歩いていった。

文明一行は（…私はこの清浄なる御陵の杜をもとほりめぐりつつ皇子をしのび奉った。

そしてあられ酒をいただいた。）とある。

左手は茶畑である（地元では茶山という）霜除けの扇風機が立ち並んで居る。折りから東陵の方よりの風に一斉に回りだした。

静かといおうか、静寂といおうか、人影も鳥の声さえ聞こえない。陵（みささぎ）の後方の山で枝打ちをしているのか、木を打つ音が小さく聞えるのみである。

御陵を一周するのに五分もかからない、鳥居の前の石のベンチにかけ、缶ビールで咽を潤す。

陵の前で時間を過ごすことにし、ふと気付くと足元に何か小さな動くものが居る。目を凝らすと、五ミリに満たない多くの蛙が一つ方向に飛び跳ねてゆく。

そんな様子をしばらく眺めながら、昼食をとりつつ休んでいた。

陵の前の峡田は実りの色となっている。刈り取りも近いようだ。

叢にも畔にも、草花の一花さえも目に入ってこない、参道沿いの狭い畑隅に、種のみとなったヒマワリが深ぶかと、土に付くまでに残っている。

陵の前で一時間が過ぎてしまった。未だ人に出合うことも道行く人影も見ることもなく。

西空を見ると、黒雲がかなりの早さで向ってくる、上空は秋晴れであり、たがはず雨となる。

墓守小屋に雨が過ぎるのを待つ、十分ほど通り過ぎていった。

笠金村が皇子の死を悲しみ作った長歌「来る人の泣く涙小雨とふれば…（二三〇）」をふと思い出した。

高円の野辺の秋萩な散りそね君が形見に見つつ偲ばむ

（二三三）笠金村

萩は志貴皇子の形見であり、ここ高円山で見たいものだと思い、峡田の周辺また林に草原にと探してみた、一本の萩すら見つけられずバス停に戻ってきた。

壊れそうなバス停の待合所に風を除け、バスの時間まで待つことにした。

なんとなく落ち付かずまた御陵の前に来てしまった。

しばらく万葉の時代まで、思いを返し思いをふくらませていた。そんな時エンジン音と共に軽四輪が茶畑に入ってきた。

現実に返り陵に一礼し、バス停に向う。万葉集の考証ではなく、万葉の地で作者の思いを、現地で感じてみたいだけのことである。

和歌から派生した季語の本意（その二十）

「かさね」「笹」　佐藤喜仙

57　麗か（うらら・うららけし・麗日）

「うららうらに照れる春日に雲雀あがり心かなしも独りし思へば」
大伴家持（万葉集）

春の日が輝きわたって、ものみなすべて柔らかに明るく美しく見える様子をいう。麗かは氷日、遅日、長閑などと関連の深い季語で、要するに同じ事象をさまざまの語感をもって言いかえた語であるが、春昼の明るさの中に悲しさも含有しているのである。

例句

うららかや猫にものいふ妻のこゑ　草城
麗かや松を離るゝ鳶の笛　茅舎
うららかや啼き忘れたる鳩時計　民三

58　雉（きぎす・雉のほろろ・雉笛）

「春の野にあさる雉の妻恋ひに己があたりを人に知れつつ」
大伴家持（万葉集）

古称「きぎす・きざし」日本特有の鳥で、留鳥である。日本の國鳥に指定されている。雄は顔が赤く、背にきらびやかな斑紋があり尾は長い。一方雌は淡黄褐色に黒斑があり、尾は短い。春に雄がケーンケーンと雌を呼ぶ恋の声を放つ事から、春の季語とされた。

例句

父母のしきりに恋し雉子の声　芭蕉
仔の牛を放てる野辺や雉子鳴けり　秋櫻子
雉子鳴きて三寸けむる雨後の土　甲子雄

59　雪解（雪消・雪解川・雪解水・雪解風）

「君がため山田の沢に恵具採むと雪解の水に裳の裾濡れぬ」
詠み人知らず（万葉集）

雪解の本意は、雪国や高山に冬の間に積った雪が、春になって解けることである。暖地に降る雪は冬の最中でもすぐ解けるので、その景は本意ではない。尚正確には雪消が「ゆきげ」雪解は「ゆきどけ」であるが、単独でも、あるいは水、道、川、風等と組み合せて「ゆきげ」とする場合が多い。

例句

雪とけて村一ばいの子ども哉　一茶
雪解川名山けづる響かな　普羅
雪消田に空より青き空のあり　梵

「氷魚」のことから（134）

岡本八千代

寒明けの雨か、二、三日降りつづいた雨も止んで陽が照りだした。今朝は子規のことが書きたくなった。

子規の弟子、河東碧悟桐の「子規を語る」（解読・平出隆）を読んでいたら、「小説会」（P77・78）の見出しがあった。そこに、「まり唄」という小説の課題が報ぜられていた。

それは当時、「国民の友」に載せられていた課題であったが、別に際だった事件もなく、問題にもならなかった。ところが、碧の中兄が（鍛？）が「国民の友」に対応して、批評文を書いた。以下抜き書きしてみる。

「今更に咎むべきにはあらねど唯だ発句のみ多くて他の文学の僅ばかり見ゆるは如何にや、発句の国文学に於ける地位、将来に於ける発句の発達、発句学の、浅深など考え来らば、諸君は重きを発句に置き過ぎずや、諸君の見識は一方に偏し居らずや、何ぞ雅文を作らざる、狂歌をも読まざる、近松なり西鶴なり馬琴なり種彦なり、文章は猶多く、川柳なり都々逸なり、詩も豈乏しからむやは、諸君請う其眼を大にしてよ、其見を偏せしむるなかれ（下略）」

とぞ。……このような勧説もあったので、子規も小説会をやるような気にもなったのではないか？。そして、碧氏は、「尤もそれまでの子規は小説界に乗り出す十分な野心を持っていた」とさえ言っている。そして、碧氏はじめ子規の弟子たちは、こっそり、小説の物まねを書いて見た事もないではなかった」と吐露していた。——かくして、子規の「写生」は、「写生文系小説」として、やがて、明治40年頃に伊藤左千夫の「野菊の墓」、長塚節の「土」などの小説が発表されてゆく。子規亡き後の俳句誌、「ホトトギス」は虚子が受けついで、夏目漱石の「わが輩は猫である」「ぼっちゃん」「草枕」等々と小説の発表ともなってゆく。

そこで、今回は子規の小説、「当世媛鏡」のあらすじを書いてゆく。

一。

○江戸は東京と変った。——入谷の片里に、片間千之丞という人があった。

○千之丞は、性来無骨な人で、今は読書三昧にふけり、よく髀肉を叩いていた。

○商売に手を出し千金をつかみ試みる程の世才もない。

○時と押し移って等外官吏に浮世を化す程の野心も持たない。

○片間の財産は二三年の内に資本も子もなく、一家の行方さえ分らなくなった。

○千之丞は、今は，話す相手もなく、笑ってくれる知己も無く、五歳になる女の子清と、親の代から仕えていた老僕八十平を徒然の話し相手に、また、あさという下女を抱えて家の世話を任せていた。

○片間の縁者は、東京の小石川のほとりに一軒あった。母の名はためと言い、四十を越えている人。子は小萩才吉といって，今年七歳の若年ながら、彼が一家の主となっている、二人暮しであった。

母親は、才吉を「人にはすぐれて、発明なる生れの行末頼もし」と思っていた。

○才吉は、片間の家に来て、片間の五歳になる清と鬼ごっことか、姉さまごっこ、摘草ごっこなどしてよく遊んだ。

（次回へ）

ことのはスケッチ(399)

「英訳」5

今　泉　由　利
Daniel Sommariva　援護

○一億分の一センチメートルの一粒の原子が幾つ私が出来る

I am of billions of atoms as are all things.

○水素より ヘリウム　炭素　酸素へと　出来そめきたり宇宙のはじめ

As one element made contact with another,
Such was the creation of the world.

○穏やかに　明るみきたり　マンハッタン　消えてゆくゆく　オリオン星座

As dawn approaches over the city ot Manhattan the stars qently fade away with the morning light.

○人類のつくりいだせり放射能　　地球を壊す作業はつづく

Unnatural radiation has been created by man, as we continue to disturb mather nature.

和菓子街道（65）

http://www.trad-sweets.com/

平 松 温 子

関宿を過ぎ、一路、鈴鹿峠を目指す。途中の 48 番目の宿場町坂下は峠を控えた荷駄の集積地として栄え、道幅も他の宿場より広かったが、今は数軒の家が立ち並ぶだけの静かな山村だ。

かつては山賊が跋扈した怖い鈴鹿峠を下っていくと、やがて坂上田村麻呂ゆかりの田村神社の杜が見えてくる。ここまでくれば、ほっと一息。49 番目の土山宿の入り口だ。

ところで、鈴鹿峠には山賊ばかりでなく、巨大な蟹の化け物も出たとかで、その化け蟹退治に由来する「かにが坂飴」が江戸時代からのここ土山の名物になっている。旅の僧が退治した化け蟹の血で作った飴を里人に授けたのが始まりで、厄除に効のある飴として旅の土産に喜ばれたのだとか。蟹の血の味ってどんな味？と舐めてみたら、ほんのり甘い昔ながらの麦芽糖。懐かしい味を舌の上にのせて、古い時代の趣が残る土山の旧街道を散策した。

今も近隣の人たちが集まって手造りしている「かにが坂飴」

◆高岡孝商店
住所：滋賀県甲賀市土山町南土山甲1301
電話：0748-66-0953

お知らせ

▽四月号原稿は、三月一日（木）までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配（日曜、祝日）を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一一四－〇〇二二　今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△白井久吉先生がお亡くなりになりました。平成二十四年新年号には、歌稿をいただきました。二月号には、いただけませんでした。

長い間、三河アララギをお導き下さいました。ありがとうございました。

△校正について

ゲラ刷りが届くと、即辞書ルーペ、赤ペン定規等を揃えて校正を始めます。二人の編集委員が、それぞれに目を通し誤字・脱字・送りがな等々……赤ペンによる訂正を……そして最後が二人に寄る読み合せ……、こんな段取りで校正を終えます。「念には念を入れて」そんな思いで作業するのですが、残念なことに完璧ということは至難、お許し下さい。

△私自身四十年近くを、短歌を友としてきました。短歌を作る、まずあらゆることに興味を持つ、知らないことは人に聞く、ラジオ、テレビより情報を得る、辞書の類・図鑑等をひもとく、メモをする。先人達の優れた歌を読み、それを理解する、そして少しでもそこから得たものを自分の知識としたい。（小野）

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヵ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千円、一ヵ年分四千円とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十四年二月二十五日印刷　第五十九巻　第　三　号
平成二十四年三月一日発行　定価　六百円

編集部　岡本　八千代・小野　可南子・夏目　勝弘
　　平松　裕子・山口　千恵子
発行人　今泉　由利
発行所　三河アララギ会
　　三河アララギ発行所　〒四四一－〇三一一
　　豊川市御津町御馬西三七
　　TEL（〇五三三）七五－二〇〇九
　　振替口座　〇〇八三〇－六－五六二二九
　　URL　E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp
　　Homepage http://imaizumiyuri.jp/
印刷所　株式会社　桜創美